

心理療法過程における母子関係の変化(1)

—— 幼児期の事例 ——

田畑 洋子

The Improvement of Mother—Child Relationship as seen in Psychotherapeutic Process (1)

—Cases of Infancy—

Hiroko TABATA

目 的

心理療法の過程においては、対人関係の在り方が問題にされることが多い。友人や教師など外縁的な関係から、クライアントの問題が人格の中核に近いものになる程、きょうだい、親など身近な人達との関係が問題になってくる。特に母親との関係は乳幼児期、児童期、青年期、成人期いずれの年代においても、形こそ違え重要な話題である。年齢が低い程、現実的、具体的な母親との関係が、青年期以後は、内的なイメージとしての母親像が語られることが多くなる。取り上げ方は、クライアントの年齢や性別、病理性などの条件によって異なってくるが、心理療法を行っていく上でのキーポイントの一つになると考えられる。

心理療法の経過の中で、母子関係の調整や修復がどのように行われていくか、そのことがクライアントの変化にどのように関わってくるのかについて、各年代別に自験例を通して考察していきたい。本稿では幼児期の事例2例を取り上げる。

方 法

筆者が担当した事例について、面接記録をもとに経過をまとめる。面接は週一回、50~60分、対面法である。面接の基本的態度および技法は来談者中心療法によっている。

結 果

事例1 A. F. 2歳女兒

1) 主訴；ことばの遅れ、ことばは単語のみで動作をあらわすことばが出ない。理解は出来ている。

2) 生育歴；出産時—帝王切開（長女の時も）。始語—1；0位，“パン”。始歩—1；2。著患—なし，人工栄養

3) 家族；父—35歳，会社員，単身赴任。母—31歳，主婦。姉—7歳。本児—2歳9か月。

4) 問題の発生と経過；1；4，母の姉に“反応が弱いんじゃないか”といわれて気をつけるようにした。1；6，保健所の検診で“反応が弱い，母親が話しかけるように”といわれた。1；9，同じく“自閉症的な所はなくなった”といわれた。この頃から甘えるようになり，最近はべたべた，ひざの上ののる。

5) 治療形態；発語に遅れはみられても，理解力はあること，生活習慣の自立，運動面の発

達から、知的な遅れによるよりも、情緒面の問題が大きいと判断し、母子並行面接をする。母子関係の調整を目標とする。母親のカウンセリングは筆者が担当、子どもの遊戯治療は吉村智恵子（教研助手）が担当である。

6) 面接の経過

インテーク（4月25日）より第18回面接（翌年2月21日）までを計5期に分け、母子関係を中心に記述する。“ ”はクライアント（以下CIと記す）、「 」はカウンセラー（以下C○と記す）のことばである。

①インテーク（4/25）

アフロヘアにジーンズ姿の母親と、どこか大人びた暗い顔つきの女の子のカップルである。母親は前記の生育歴や問題の経過の他、長女との比較でA子との関係話を話していく。“長女はよく泣く子で手がかかった。はいはいもしなかったし歩いたのも1歳5カ月、3歳まで階段を降りられなかった。長女の世話にかかり、A子は寝かせていた。きいきいいうこともなく、手がかからなかった。長女に手がかかったので、下の子にはもっと上手にと思って、手をかけなかった所もある。長女はいろいろいってくるので相手をするようになるが、この子はジュースでも自分でさっと出してくる。どういう風にしてあげればいいのか分からない”と、とまどいが語られる。“子育てが下手、新しいことにチャレンジする自信がない。子どもは成長するのに親が心配してしまう。上の子の時はおしこの仕方なども少し上のよその子どもが教えてくれた”と、CI自身の不安感や自信のなさもみられる。近隣関係についても安定していない。本児誕生の一年前に現在地に転居、近所の人とのトラブルもあり、“ここに居るのは嫌、引っ越したい気持ちである。長女の時は団地で楽しく育てていた。この子の時は、話相手もなかったし、楽しくしゃべっている親の姿を見せることもなかった”と語られる。加えて、父親も不在という条件があり、本児の問題をきっかけにして、母親の成長を支えていく必要を感じた。

②母とのつながり—#1（5/2）～#6（6/27）

インテーク面接に引き続き、A子の乳児期が振り返られる。“夜泣きもなかったし、おびえることもなかった。ただ大人しいということだった。人見知りも気がつかない。1歳10カ月頃から眼を合わせるようになってきた。呼んでちゃんと来るようになったのは今年に入ってから。”親が動き出したのと呼応して、子どもの方も甘え出し、“チュッするようになった。最近一つのふとんでないと駄目。”

一方、CIは自分自身の幼児期や親との関係を想起する。#2には“父はうるさかった。商売でずっと家に居たのがみがみいわれた。たえずびくびくしていて、テレビでもほっと見たことがない。”“私はこわがりで消極的だった。幼稚園も半年程行けなかった。親と離れるのが嫌だった。たしか、幼稚園の願書出しに行くのもおんぶされて行った。”“長女は私と似ている、自分で動くのがいやで、人にしてもらおう所。私も母と似ていて、泣かれるのがいやでやってあげる。長女と違ってあの子の気持ちが分からない所が不安、やってあげるのはいくらもやってあげるがそれは拒否する。ばーんと別の面で期待していると思うが、何を求めているのか分からない。”自分の親への気持ちは“親に対して冷たい、愛情が薄いと思う。自分の親なのに同居するのは嫌だと思う。母親は私のこと分かってくれない。だからあんまりいわない、中学生の頃からそう思っていた”と表現される。”#3ではCI自身の不安感が話される。“子どもが出来るまで一人で家に居るのも不安だった。夜トイレに行くのも怖かった。”また“車の免許を19歳でとったが怖くて運転出来なかった。A子が乗りたがるので思い切って乗り出した。私が変わればあの子のためにいい影響があるんじゃないか、よろこぶ顔が見たい”と子どもにひっ

ばられて変化しようとしている様子が語られる。“中高時代、ちんたらちんたらしていた。帰ってくると横になるという感じ。すぐ疲れて、疲れてくるといらいらする。子どもに近い、お昼過ぎると昼寝したい”といきいきと生きてこなかった様子、現在も疲れやすいことが話される。

子どもの方は、父親が“見る度が変わっている”というように、近所の子と一緒にうろうろする、“アイス、アイス”とあって要求する、洋服の汚れを前程気にしなくなり、砂いじり、どろんこ遊びをするように変化してきている。しかし、CIの気持ちは“可愛いがらなくてはと思いつつ、心の片隅で何となく疲れる。可愛がっているふりをしながらいやいやつづけている。いつも重荷、あの子から逃げたい、子どもはそれが分かって打ち解けないのではないか”というように、“自分と似ていて、手はかかるが気にならない”長女と違って、A子に対しては自然な愛情を示すことが出来ない。(＃4) A子は“外で子どもの声がすれば出て行く、みんなの持っている物をほしがる”と外への興味が出てき始める。“カルピスをかきませたり、しょう油をかけたり”母や姉の真似をする。“ここからの帰りは必ずだっこ、朝、眼がさめると母のふとんに入ってくる”と母親への甘えもみられる。(＃5) #6では“自分で哺乳びんをくわえて飲む真似をする”ことが報告され、“だっこして飲ませたことがない”と振り返られる。Coから「ミルクを入れてだっこして飲ませてみるように」助言する。また、母の乳房をいじったり、鼻や眼を指差す、耳の穴に手をつっこむなど身体確かめが出てくる。“自分の赤ちゃんの時の写真を見ることもある。”母親との間も“ことばはずんでいて、生き生きとしてきた、無理なくちゃいけないのが自然に消えてきた。”と変化してくる。

この頃、祖母におふろに連れて行ってもらうことがあり、“向こう(CIの母親)が変われば、子どもも変わると思う。こっちが頼んで見てもらうのとは違う。いけば変なものだし、よういわんかった。ここへ来るのも言ってなかったが、向こうから聞いてくれた”と、CIの母親に対するわだかまりがとけてくる。“自閉症といわれて足が悪くなった。連れて歩くこと自体が苦痛だった。今は痛くないが”と、身体症状として出ていたことも明らかになる。“足は痛いし、しゃべらんかったし、三歳になってもしゃべらんかったら死んだ方が楽と思った”とかなり危機的だったことが振り返られる。今は“考えがすごく変わってきた。ことば出なくても幼稚園に入れちゃおう”という。

③夫との結婚—#7(7/11)～#9(9/6)

夏休み、父親が家で過ごし、子ども達の相手をするのを見て、CIは夫との結婚を確認する。

#7, 両親で来室し、父親の方から“ことばをいってくるようになった、なついてくる。物を取ってほしい時、人の手を使っていたのが、自分で指すようになった”と、A子の状態が報告される。CIも“長女の時と感覚が同じになってきた、同じように歩んできているという感じがある”と話す。哺乳びんも使い、“母のひざで手を離して持ってくれという感じなので、抱っこして飲ませた”と報告される。#8では“食べることしか関心がなかったが、のべつ幕なしに食べるものがなくなった”と話され、食べることの意味について話し合う。この頃、A子の表情が可愛くなっているのをCoもセラピストも感じる。

#9では、A子が食事の度に“パパ”“チャーチャン”と指差すといい、家族の確認がされているのが分かる。

CIは父親と子どものやり取りを見ながら“主人は目一杯やってる。子どもが生き生きとしていて”と夫の大切さを感じてくる。結婚のことが語られ、“26歳、22歳で恋愛結婚、主人そのものにはあんまり魅力がない、長女に目一杯やってやるのを見て、考えが変わった。安心感が

ある。お父さんは大事、これは何があっても別れたくないと思った。” “子どもを叩くのでいや” だった父親と比較しての見直しではある。“子どもを可愛がるのを見てると、自分がしてもらえなかったので満足” という。“主人によくしてあげなきゃと思った。子どもが生まれてから誰よりも主人” ともいう。この頃、夫の単身赴任も終わることになる。

④授乳体験一#10 (9/13)

“哺乳びんを又使い出した” といい、“一日一回、夜眠くなったらお茶入れる。母親にすわれとって飲ませてもらう。ガジガジかむ。やると落ち着くみたい。顔見てやると、赤ちゃんの時みたいに顔見てる。ふっと手を離して赤ちゃんみたいになる。不思議に赤ちゃんみたいな気持ちになる。赤ちゃんの時もそうやってやればよかったと、悪いなと思う” と話される。眠くなれば、看護婦さんセットを持ってきて、手当ての真似をしてもらったりもする。“義務的にやっていたが、一緒にやれるようになった” と、A子との間でようやく自然さを取り戻してくる。A子のことを“フーと自分の世界に入ってしまうこともあったが、今はそんなことはない。この世界にきょろきょろしている” と表現する。

ことばの心配は消えないまでも、CIにゆとりが見られるようになり、髪形、化粧が地味になってくる。

⑤入園準備一#11 (9/27) ~ #18 (翌年2/21)

#11では三歳児検診で“ことばだけが落ちている、他は普通” といわれたことが報告される。幼稚園に入れた方がいいかどうかの迷いが始まる。A子の様子を聞きながら、CIの決定を援助していくことになる。A子は友達が来ても喜び、砂遊びを皆と同じにするなど、人間関係は開けてくるが、気に入った洋服しか着ないなど、こだわりも出てきている。

CIも近所にとけこみだし、“畑のすみで子ども達が砂遊びをするようになり、そこが社交場になっている。母親同志もしゃべり合い、2、3時間は過ぎていく” と話される。(#12)

#14, “幼稚園に行った方がいい、お友達と遊びたがっている” と入園させることを決意する。この回“隔週にしてほしい” との申し出があり、受け入れる。

#15はA子の対人関係が話される。“ことばはしゃべらないけど、じゃまにされない、一緒に入ってるという感じ”, “A子ちゃんは赤ちゃん, A子ちゃんは可愛いから入れてあげよう” と仲間に入れてもらうという。特に隣の2歳の男の子と毎日遊び, “その子が抱きついたりする。” この男の子からは花束をもらい, 大事に飾っているという。(#16) CIは “この世界に慣れてきた感じ” と表現する。

次回, 乳児期のことが再び話題になり “顔見てないと忘れてしまう, 母親のことを忘れていってしまうような感じがあった。自分だけ別個の世界に入ってしまう。呼んでも振り返らなかった” という。“この世界にいる” というのはまさに母親の実感なのであろう。

グループでやる『ことばの教室』に通い始め, 一人の子どもが好きで, その子の真似ばかりするようになる。CIも “よろこんで幼稚園に行きそうな気がする” ようになる。“ここへ来て, 土台が出来たからよかった” と来室の意味が話される。終結の申し出があり, #18が最終回になる。当時のことばの状態は, 名詞の増加に加え, 形容詞, 動詞が出てくる。“コレ マッチ”, “パパ オカエリ” など二語文も時に出る。数は3まで理解しているが, 5以上は“イッパイ” になる。幼稚園の看板を見て “アンアン” と指差し, ランドセルを背負う練習をしている。一つの物へのこだわりはみられる。排泄, 食事など日常の生活習慣には問題がない。

事例2 R. H. 3歳女兒

1) 主訴; 家ではよくしゃべるのに, 外ではしゃべらない。

2) 生育歴；出産時—異常なし。始語—不明。始歩—9；6。著患—なし

3) 家族；父—30歳，会社員。母—28歳，主婦。本児—3歳8カ月。妹—1歳3カ月。

4) 問題の発生と経過；母は本児を連れて義兄の店を手伝い，食事と一緒にしていた。R子は誰にでもなつき，客に遊びに連れて行ってもらったりもした。妹の誕生時，母の実家に連れて帰る。その時は，電話でこちらの祖父母に話をしたり，歌ったりしていた。こちらに帰ってから急にしゃべらなくなった。電話にもでない。

5) 治療形態；母子並行面接，母親担当は筆者，子ども担当は奥田須佐子（元名女大助手）である。母親に対しては，育児不安を取りのぞくためのカウンセリング，子どもには情緒の解放をはかり，自発性を高めることを目指して遊戯治療をする。

6) 面接の経過；11月10日のインテーク面接から，翌年2月23日第10回面接まで，母親の面接経過を記述する。“ ”はCIのことば，「 」はCoのことばである。

①インテーク (11/10)

父母，本児，妹の4人で来室する。父親が20分程，遊戯室でR子と同室，妹は母親と分離できず，最終回までひざの上であやしながらの面接となる。両親とも，弱々しそうな，やわらかい印象である。父親は線が細く神経質という感じがみられる。

上記の問題の発生と経過が話された後，“生まれてすぐのR子を連れて店に手伝いに行き，はじめは寝かせていたが，忙しいとおぶって仕事をした。妹が生まれてから，上の子に特に気をつけるようにしている”と育て方について話される。本児の性格については“大人しい，神経質”ということなので，“具体的には？”と問う。“親戚の家に行ったりすると，行った所でないのに‘おしっこ’という”と，頻尿傾向のあるのが分かる。神経質傾向は本来的に持っているようである。

CIは“兄嫁とうまくいかないのが苦になっている”といい，遠方から夫の親戚の多い所に嫁いできての気遣いのあるのが推測された。

②待つ気持ちになるまで—#1 (11/17)～#7 (翌年1/26)

#1，“ボタンはめたり，パジャマを着たり，自分で何でもできるようになった”と報告される。一方では“おんぶして，だっこして”と甘えてくる。“妹が哺乳びんで飲んでいると，‘哺乳びんで飲みたい’という。寝る前に同じように哺乳びんで与える”とわがままにならないかと心配はしながらも，甘えを受け入れている。

#2には本児の乳児期が振り返られ，“私は娘の頃から自信がない。R子が生まれた時，在所から帰ってどういう風に育てたらいいかと思って，ごはんも喉を通らないようになった”と不安の強かったことが話される。その頃“店でもいろんなことがあったが，何もいえなかった子どもにあたったりした。くよくよ考えていえる方でないから，姑達との同居の話も苦になっている”と涙ながらに語られる。

保育園入園の面接があり，近所の人や祖父母から“しゃべらないと保育園にいけないよ”といわれる。CIの焦りも強いが“やっぱりおびえている”と，R子の気持ちも分かってくる。

“考えていて思い出したが”と，“赤ちゃんの時，泣いて眠らないことがあったり，昼寝の時，とび起きたことがある”と話される。子どもの状態はむしろ悪化し，“最近まばたきをするようになった”とチックが出てくる。目の前でぐずっている次女をあやしながら“この子は母親から離れない。R子は誰でもよかった。私は忙しくてR子との接触はあまりなかった”といい，しみじみと“(妹は)やっぱり甘えていますね”という。R子との違いを実感したようであった。

年末年始に帰郷し，#6には明るく安定した様子で来室する。“A市にいるとやっぱり安心

して落ち着ける。こちらに居て、何があるというのではないが、何となく落ち着く”と母親自身が安定感を取り戻したようである。“まわりがやいやいいうとよけい駄目だから、そっとしておこう”と両親が話し合っている。

③おねしょがなおる—#8 (2/9)～#10 (2/23)

#8, 子どものペースを尊重して待つ姿勢を決めた後, 生活習慣が話題になる。“こんなこと聞いていいでしょうか”との前置きの後, “夜おもらしをするので, おむつをしているが, はずした方がいいか”と質問が出る。おねしょの他にも, 夜遅くまで起きていて朝起きられないという生活習慣の問題があることが明らかになってくる。子どものおねしょや生活の状態を話し合った後, Coの方から助言をする。Ciは“早速今晚からやってみます”と取り組む決意をする。1週間後の#9, “夜中の一時半頃, ぱっちり起こしてやらせると朝までしなかった。寝る前の水分は減らすことが出来た”と報告される。

#10, “おねしょはよくなった。6時頃起こせばよくなった。ほんとうによかった”と報告され, 次は睡眠時間が問題になる。9時頃, 電気もテレビも消して大人も一緒に寝ているが, なかなか寝ないということである。Coの方から「大人と子どもの生活は分けること」と助言しておく, “ゆうべは‘R子ちゃん, 一人で寝るから向こうに行ってもいいよ’”といった”という。

おしゃべりについては, バスの中や銭湯で他の人がいても大きな声でしゃべるが, 一対一で何か聞かれたりしたら答えないという状態である。

保育園入園が決まり, “子どもはとてもよろこんでいる”, Ciも“話し相手が出来るので楽しみ”ということで終結を決める。

考 察

1. 乳幼児期の母子関係—精神医学の知見から

心理-性的発達論を樹立し, はじめて乳幼児期に光をあてたのがフロイト (Freud, S.) である。フロイトは子どもが母親との同一化, 父親との同一化を通して, 価値規範や対象像を内蔵化させることを明らかにした。この考えは母子の相互作用を理解する基本的な枠組みを提供している。

授乳期の母子間の相互適応に注目し, 母子を“授乳する一組のペア”としてとらえたのがミドルモア (Middlemore) である。この観点はウィニコット (Winnicott, D. W.) にひきつがれている。彼は赤ん坊は常にカップルとしてしか存在しないという。乳児の育児に自然に没頭し (maternal preoccupation), 乳児を抱き支え (holding), 乳児の発達につれて次第に完全な (perfect) 環境から, ほぼ良い (good enough) 環境への移行が出来る母親を“ほぼよい母親” (good enough mother) としている。彼の提供する概念は母子関係の理解のみならず, 母子関係が投影される治療関係を理解するためにも有用である。

一方, 乳幼児が母親に対して持つ深い情緒的な結びつきのことを“愛着 (attachment)”という概念で説明したのがボウルビィ (Bowlby, J.) である。愛着の乳幼児にとっての重要性が明らかになると共に, 欠乏, すなわち“母性的愛着の剥奪 (maternal deprivation)”が乳幼児の発達に与える影響も研究された。スピッツ (Spitz, R.) は母親を急に失った時に乳幼児に深いうつ状態があらわれることを観察し, 依存抑うつ (anaclitic depression) と名づけた。他にアンナ・フロイト (Freud, A.) による戦災孤児の研究をはじめとしてホスピタリズムの研究がされた。これらの研究を通して, 乳幼児の母親からの分離と対象喪失がどのような障害を引

き起こすかが明らかにされていった。

乳幼児が母子一体の状態から分離—個体化 (separation—individuation) していく様子を解明したのはマラー (Mahler, M. S.) である。マラーは生後すぐの自閉期、共生期からどのようにして子どもの意識が孵化 (hatching) し、母親と分離し、個体化していくかを解明した。分化期、練習期、再接近期を経て、生後3年目になり個体化が確立し、情緒的対象恒常性 (emotional object constancy) を獲得するとしている。すなわち、子どもの心の中で自己表象と対象表象が区別され、母親のイメージが永続性を持つてくる。母親の不在や欲求不満でそのイメージが破壊されなくなる。子どもは自分の心の内に、安定し一貫した母親像を持つために、母親から離れることが出来るようになる。この過程の進行のためには、乳児の側の運動・認知能力の発達と共に、母親のその段階に応じた適切な情緒的応答性が必要であるとしている。

また、エリクソン (Erikson, E. H.) はライフサイクルの視点から乳幼児期を位置づけた。乳児期は母親あるいはそれに代わる母親的人物の世話を受けることにより、その後の人生を歩むに必要な“希望”という発達の力を得る。次の幼児期は自己の心身をコントロールすることを学び、“自律性”を獲得するとされる。母子関係の問題では、しつけを通しての相互作用が起こる時期である。

乳幼児の世話をすることは母親の成長を促進することになり、母親の心の中では自分の母親との相互作用が想起されたりもする。“家族というものは赤ん坊に育てられることによってのみ、赤ん坊を育てることができる”²⁾ のであり、“母親自身が、その母によってはぐくみ育てられた経験をもつ”³⁾ ことで子どもを養育出来るのである。エリクソンは世代間の相互作用や世代間伝達の視点を提供し、乳幼児期を人生全体、更に前の世代の人生との関連で総合的に見る事が出来るようになった。

以上は小此木啓吾のレビュー⁷⁾ を参考にしながらの素描である。

2. 最初の眼差しを交わす一事例1から

事例1の表面にあらわれた問題は“ことばの遅れ”である。しかし、それまでの経過から判断すると、ことばの発達の基礎になる対人関係、特に母子関係に障害がみられると考えられる。表現が乏しいという子どもの生来的な素質と母親の情緒的応答の乏しさが相互に作用し合って、希薄な関係しか出来ていなかった。すでに母の姉や保健所の検診で注意を受け、母親にも意識化され、子どもも変化し出した時点での来談である。

子どもの方は反応が弱いとはいえ、母親の働きかけに応じる力は持っている。母親の方もどうしたらよいか分からないというまどいは大きいですが、“何とかしたい”と努力を始めている。母子のやり取りをどのようにかみ合わせていくかが治療の目標とされたのである。

CIは生育歴や子どもの状態を語る時、常に長女との比較で話していった。“長女は何でもやってくれとってくるのでやってやれるが、A子は何もいってこないのどう関わっていいか分からない”という困惑である。自分が親からされたようには出来るが、他のことを求められても分からないという意味を持っている。自分の親も何でもしてくれたが、心理的なつながりは“親に対して愛情が薄い、母親も自分のことわかってくれないので話す気にならない”というように弱いものである。“一人で家に居られない”、“夜トイレにも行けない”などの不安感や、疲れやすさなどは、CI自身が親との関係で安心感が与えられていなかったためであろう。動作で求めてくる長女に対しては関係が持てても、別のも—それは気持ちのやり取りであろうが—を求めてくるとどう応じていいか分からない、“自分の母親との間で体験したことを自分の子どもに繰り返す”世代間伝達が見られるのである。現在、我が国においても、母子を一組と

して扱い治療する母子治療が行われている。母親は乳児の泣き声を聞くと自分自身の乳児期の感情を蘇らせ、この感情をもとにして乳児の気持ちを読み取り、乳児の求めに応じることが出来るのである。この事例のように“自分が受けたように”接していたのではすれ違ってしまう場合、母親が新たに子どもの気持ちを汲み取っていくための援助が必要になってくる。自分も親に愛されていたことを何らかの意味で確認することである。この事例でも、母親がA子をおふろに連れて行ってくれた、相談に行っているのかと関心を示してくれたことで、CIは母親の愛情を知り、安心できたのであろう。CIとA子の関わりは自然になってくる。A子の方もCIに要求を出し、働きかけが出てくる。ようやく両者の歯車がかみ合ってきたのである。

次に父親と比較しての夫の見直しがされてくる。“叩かれてびくびくしていた”自分の父親との関係が再現されないことへの安堵感であり、自分自身の伴侶としてよりは、子どもの父親としての夫の受け入れである。

母親とのつながりを確認し、夫が単身赴任を終えて家に戻り、気持ちが安定した時点で、CIはA子にミルクを飲ませる。授乳時の母子の見つめ合いは、最初の眼差しの交流だといわれる。CIはA子を見つめ“不思議に赤ちゃんみみたいな気持ちになる”と、あたかも自らの体験のように語っている。CIはA子との間で最初の眼差しを交わしただけではなく、自分の母親との間の交流をも取り戻したのであろう。母親に授乳してもらい、看護婦さんセットで手当てを受け、A子は現実のこの世界に戻ってくる。A子に愛らしい表情が見られるようになり、母親の髪形、化粧は地味になり、一組の母子としての調和が感じられるようになる。

この後は幼稚園入園をめぐる現実的な話題が主になってくる。おやつとの与え方などしつけの話題も出るが、自分も好きなようにしていたからと、CIの中では切実な問題となっていない。この事例ではそれがなければこの現実の世界とつながれない、母親との基本的なつながりが出来た時点での終結である。このつながりをもとにして、子どもは身体の確かめ、家族の確認をはじめ、子ども仲間へと出て行けるようになった。主訴のことばの問題も一歩遅れながらではあるが、発達のルールにのることが出来た。このように年齢が低い子どもの場合、それまでの成育過程で欠落していた部分を、実際に体験し直し、補っていくことも可能である。そのためには母親が自分の親とのつながりを確認できるよう援助していくことが必要である。母子を一組のカップルとしてとらえる視点が要請されるのである。

3. しつけに取り組む一事例2から

事例2の主訴は場面緘黙であるが、親の方の問題として育児不安がみられる。本児の生来的な神経質傾向と作用し合って、頻尿傾向、夜泣き、チックなどの習癖になったと考えられる。

乳児期は飲食店の中で育ち、誰にでもなついていくR子だったが、肝心の母親との接触は少なかったのである。“ごはんが喉を通らない”ような不安の中にある母親にとって、子どもと二人きりの状況でないことはむしろ救いであったかもしれない。しかし、それが子どもにとっては大切なものの欠落になっていることを、ぐずって母親にミルクを飲ませてもらっている次女の様子を見ながら、実感したようであった。その後、実家に帰り安定を取り戻すことが出来る。やはり、CI自身の親とのつながりが大切であるといえよう。CIが安定し、母子のつながりが出来ると次にしつけが問題になってくる。

排泄、睡眠、食事などいわゆる基本的な生活習慣を身につけることは、子どもにとって必要な課題であるばかりではなく、母親にとって、また母子関係を作っていくためにも意味を持つのである。エリクソンがいうように、子どもの世話をすることは母親が成人期の発達課題を成し遂げていくことになり、母親の成長につながっていく。

しつけは大人から与えられる枠組みである。子どもはその枠組みに守られて、安心して生活することが出来るのである。そのような枠組みをきちんと示し、守らせるためには、親が大人としての力を持っていなければならない。また、それまでの母子のつながりがなければ、子どもは親に同一視することも出来ないだろう。逆にしつけに取り組む中での子どもとのやり取りが親子の関係を強めていくことにもなる。ある緘黙の事例では、親が“子どもは自由に育てる”ことをモットーに幼児期におけるしつけを一切放棄していた。子どもは3歳頃から近所の家に入りびたってテレビを見る生活だったという。子どもは父母のことを“お父さん、お母さん”と呼ばずに“○郎、○子”といていた。小学生になってからのある日、遅くに帰宅したのに黙って迎えた母親に“どうして怒らないんだ!”といたという。親からの枠が与えられず、したがって守られてもいない子どもの不安感や悲しみがどれ程大きいのか、沈黙によって自らを守ることしか出来ないのであろう。

本事例では母親の気持ちが安定し、はじめてしつけのことが意識にのぼってきたのであろう。“3歳になるまでおむつをはずしていない状態”が問題になってくる。C Oの助言を素直に聞き入れ、取り組んだ結果、三週間で夜尿がなくなる。子どもの身体的、心理的条件はすでにととのっていたと考えられる。むしろ親の方がどうしていいかわからない状態であった。睡眠に関しても、子どもの方から“ひとりで寝る”といい出している。親の状態の安定によって、子どもの自発性が働き出したようである。母親も親としての自信がついてくる。具体的な助言もしながら、しつけに取り組む母親を支えることで、母子関係の調整をはかり、母親の成長を促進する援助をしていくことが出来ると考えられる。

要 約

心理療法の過程において、どの年代のクライアントも母親との関係を取り上げることが多い。クライアントの成長につながっていく重要な話題である。本稿では幼児期の事例について、治療過程の中でみられた母子関係の変化について考察した。授乳に象徴される乳児初期の母子関係と、次の段階のしつけの問題が取り上げられた。いずれも母親が自分の親とのつながりを確認し、情緒的に安定することで、子どもとの関係がポジティブな方向に変わることが示された。

引用及び参考文献

- 1) Call, J. et al, (1981): *Frontiers of Infant Psychiatry*. New York: Basic Books Inc. 小此木啓吾 (監訳) (1987) 乳幼児精神医学. 岩崎学術出版社.
- 2) Erikson, E. H. (1959): *Identity and the Life Cycle*. International Universities Press Inc. 小此木啓吾 (訳編) (1973) 自我同一性. 誠信書房.
- 3) Erikson, E. H. (1964): *Insight and Responsibility*. New York: Norton & Company. 鐘幹八郎 (訳) (1971) 洞察と責任. 誠信書房.
- 4) 濱田庸子 (1989): 母—乳幼児治療—1. 別冊発達9. ミネルヴァ書房. 154—162
- 5) Mahler, M. S. 他. (1975): *The Psychological Birth of the Human Infant*. New York: Basic Books Inc. 高橋雅士他 (訳) (1981): 乳幼児の心理的誕生. 黎明書房.
- 6) 小此木啓吾 (1987): 現代精神分析の基礎理論. 弘文堂.
- 7) 小此木啓吾 (1989): 精神分析から見た乳幼児の心の発達. 別冊発達9, ミネルヴァ書房. 24—30
- 8) 渡辺久子 (1989): 母—乳幼児治療—2. 別冊発達9. ミネルヴァ書房. 164—178
- 9) Winnicott, D.W. (1965): *The Maturation Process and the Facilitating Environment*.

London : The Hogarth Press Ltd . 牛島定信 (訳) (1977) : 情緒発達の精神分析理論. 岩崎学術出版社.